



空き家を改修して整備された地域の拠点
 ① 中和の地域づくり拠点『えがお商店』
 ② 社地域の活動拠点『神戸(こうど)の館』

空き家を地域資源に

空き家を活用して移住者を積極的に受け入れ、地域住民が主体となって、移住者の定住支援や地域の活性化などに取り組んでいる地域があります。

このような取り組みをしている自治会などの団体を、真庭市では**定住支援活動奨励団体**として登録し応援しています。その中の3つの団体の代表者にお話を聞きました。

北房未来づくりネットワーク 空き家活用チーム

平泉 繁 さん(下皆部)

北房地域振興計画を策定するために集まった地域住民が母体となり、令和4年に発足した、北房未来づくりネットワーク。その中で、空き家活用や移住者支援をテーマに活動するメンバーで構成している団体です。今年、定住支援活動奨励団体に登録されました。



今、街の中に空き家が本当に増えてきて、心配で何とかしようこの活動が始まりました。

多くの移住者にとって、移住先として必要な条件は、一番が住むところ、次に収入が無いと生きていけないので仕事、そしてやはり子育て環境という感じでしょうか。田舎に憧れて探している人はいっぱい居ると思うんです。でもやっぱり条件がそろって、しっかり情報発信しているところに多くの人が行くんですね。だから、皆さんに来てねって言うためにも、空き家活用はやっぱり必要かなと思います。

自分も、今から26年前に北房にきた移住者です。移住希望者がおられれば、空き家の情報提供だけじゃなく、自分の経験を伝えたり、空き家チームとしてできる限り対応していきたいと思っています。移住には、来てからのフォローも、ものすごく大事だと実感しています。地域を未来につないでいくためにも、地域に人を呼び込みたいという思いを皆さんと共有していければ。来た人を受け入れる気持ちも広がってほしいです。そのためにも、少しずつでも活動が続けて、もっと地域の皆さんに知ってもらいたいなと思っています。



中和定住案内所 大美 康雄 さん(蒜山吉田)

平成27年から、地域づくり活動『中和いきいきプロジェクト』として多彩な事業をスタート。平成29年には空き家プロジェクトと題し、真庭なりわい塾生や住民と一緒に空き家を改修して『えがお商店』を整備し、中和定住案内所としての活動を開始しました。平成30年に定住支援活動奨励団体に登録されました。

約10年前、中和の将来の人口推計に危機感を抱き、何とかするために、新しい地域づくりをやらないかという話になりました。まずはみんなの意向を聴いてからと、平成26年に、地域の全世帯を対象に、地域外の人との交流や移住の推進についてアンケートを行いました。すると、予想以上の人が賛成してくれ、じゃあやってみようということになりました。

まず、平成27年に、中和を元気にするとはどういうことか、掘り下げて協議し、「中和小の存続」なりわいの創出「居心地のよいコミュニティの実現」の3つを目標として掲げました。そして、これらの目標に向かって行うさまざま

な地域づくり活動を、中和いきいきプロジェクトと総称して進めることにしました。その中で平成29年には、空き家プロジェクトとして、空き家調査や『えがお商店』の整備を行い、中和定住案内所を設けて、移住希望者とのマッチングや、空き家を活用した移住・定住支援を始めました。

一連の取り組みによって、地域の中でも空気が変わってきました。22軒の空き家に灯がともり、20世帯の移住がありました。児童と園児の減少にも、歯止めがかかりつつあります。半分くらい移住世帯の貢献です。地域を挙げた取り組みが実を結び、今、目に見える形で成果が出てきています。



グランパ美甘 稲田 文夫 さん(黒田)

平成28年に発足。元々地域の夏祭りが必要な土地を購入するために資金提供してくれたメンバーの集まりでしたが、せっかくだから何かできることを、と地域内の空き家調査をすることに。これがきっかけとなり、その後も空き家活用や移住サポートなどの活動を続けています。令和2年に定住支援活動奨励団体に登録されました。

空き家調査では、みんな忙しい中、それぞれの地区で頑張ってくれました。住民主体だったので、この空き家の所有者はどこの誰で、ということも大体分かり、知り合いづてで連絡がきました。これがきっかけとなり、移住者が来るときには、空き家を住めるように整備したり、引っ越しの手伝いや片付けをしたり、地域の人につないだり、移住後のフォローをしたりといった活動をするようになりました。移住者の中には、私が行っている高齢者の移送支援などを手伝ってくれる人もいます。私たちも段々年を取ってきたので、後継者のことも考えないといけません。将来的に、移住者の

若者が地域を支える人材になってくれればと願っています。私は高齢者の方と、亡くなった後家をどうするか、話すこともよくあります。高齢者の移送支援や日常の困りごとのサポートなどの活動もしていて、地域や高齢者の方と、そういうことも話せる関係性ができているのかなと思います。人が使わなくなつて一、二年過ぎると、家は使い物にならなくなります。空き家になる前から、なるべく早く把握できていれば、移住者の方が現れたときもいろいろな対応ができるし、話もスムーズに進みやすいです。普段からの人と人とのつながりや関わりが一番大切だと思っています。